氏名	関根　秀治
学位	博士（芸術学）
学位記番号	博（芸）甲第五号
学位授与年月日	平成十七年九月二十四日
学位授与の要件	学位規程第三条第三項該当
学位論文名	綜合藝術としての茶道の原理 ――茶・易・禅――
審査委員	主査　教授　倉澤　行洋
	副査　教授　池田　有隣
	副査　教授　山野　耕治
	副査　教授　千　玄室

論文目録

序　章　藝術・藝道・茶道という言葉について
注
第一章　禅林における易学研究と喫茶
はじめに
第一節　易について
第二節　禅林における易学研究
第三節　禅林における喫茶
おわりに
注
第二章　茶道名人と易経
はじめに
第一節　精行倹徳之人と八卦風炉
第二節　大黒庵にこめた紹鴎の秘事
第三節　利休・宗易という道号・法名と易経
おわりに
注
第三章　易が茶事に与える影響
はじめに
第一節　易の象・数論理と茶事の大法
第二節　易の象・数論理と茶道のカネ割論
第三節　茶道の火相・湯相論に見える「感応の美」
おわりに
注
終　章　今後の課題

論文内容の要旨

本論文は、茶道を、点茶と喫茶を機縁として成立した綜合藝術として捉え、主にその原理の考察を目的とするものである。

周知のように、茶道修行は、まず立居振舞（所作）や基本的な主客の会話、そして茶器の扱いなどからはじめ、その後、初歩的な点前から奥伝へと進み、点前作法をある程度修得した後、茶事を実践するというのが、一般的な茶道修行のあり方である。この過程で、建築、庭園、絵画、書、料理、陶磁器、竹細工、漆器など、いわば今日一般的にいう藝術の各ジャンルに分属できるものを取捨選択しながら学び、会得したこれらの諸藝術の内容を再編成して、主客の会話や立居振舞（所作）とともに茶事という形で表現する。茶道では、今日一般的にいう藝術の各ジャンルに分属できるような、建築や庭園、絵画や書、料理、陶磁器、竹細工、漆器などをうまく一体的に綜合させている。しかも、ここでいう綜合とは、ただ諸要素の寄せ集めではなく、ある理念に基づいて体系化されることを云う。したがって、狭義の藝術の視点からいえば茶道の各構成要素はそれぞれが立派な藝術だけではなく、また広義の藝術の視点からも茶道そのものも一種の綜合藝術と云える。ここでいう広義の藝術は、即ち西洋で云う狭義での藝術ではなく、古来から東洋で使われてきた広義での藝術の意味である。

また、千玄室博士が『「茶経」と我が国茶道の歴史的意義』（淡交社、一九八三年）の中で述べられたとおり、「茶を喫するという極めて日常茶飯の行為を通して、他界的な世界への超脱を意図するという特有の文化を形成したのが茶道である」。即ち、茶道はたいへん「他界観念的な遊戯性」の豊かな藝術文化でもある。

さらに、倉澤行洋博士が『増補　藝道の哲学』（東方出版、一九八七年）の中で述べられたとおり、茶道修行とは、姿から心への修行であると同時に、心から姿への修行である。「姿から心へ」の修行とは、表現されたものを通して表現するものを高め・深める修行である。この修行によって究極にまで深められ・高められ、自己否定的に転換再生した心、その意味でいえば「回心」した心を、「真心」と呼んでいる。それはまた「絶対心」とか、「無心の心」とか、「自己本来の面目」とか、「主体的無」とか称されて、また南坊宗啓の著わしたと伝えられる『南方録』では、これを「心ノ一ツガネ」と称している。姿から心への修行は、心が、この「真心」ないし「心ノ一ツガネ」の意味での心にまで、深められ・高められることを目指すものと言える。それから、「心から姿へ」の修行とは、この「真心」ないし「心ノ一ツガネ」をいかによく「姿」として表現するかに関わる修行である。つまり、単に学問的に対象的に茶道を研究するのではなく、また単なる高尚な趣味や教養、仕事の合間の息抜きや消閑の楽しみとして茶道を行うのではなく、それを生きる支えとして全身全霊を挙げて行う人にとっては、茶道は「茶から心へ、心から茶への道」、その意味での「心茶」であり、それはまた「禅茶」にほかならないのである。鵬雲斎大宗匠（千玄室博士）の近くで主体的に茶道の修行を取り組んできたつもりでいる筆者としては、この茶道修行論に共鳴するものである。ただ、倉澤博士のいう「心茶」を理解するためには、また千玄室博士のいう他界観念的な遊戯という境地に到達するためにも、茶から禅へ、そして禅から茶への過程で重要な媒介の役割を果たしている易の象・数を理解しておく必要があると考えている。茶道の形成即ち茶事の全体的あり方や点前作法は、茶道の聖典と呼ばれる『南方録』によれば、易の象と数の理論に基づいて系統化されたものであるからである。

易の象と数によって示された理は、禅心に通じる部分も多く、茶心への理解の手だてともなる。点前をする場合、位置・順序・動作といった三要素が重要視される。実は、この点前の三要素を支える最も重要な原理は、易の象と数の理論である。易の象と数によって決められている諸々の茶のカネを身につけ、それに基づいて修行を重ね、道を逸れることなく、いつか必ず「百千万ノ本式ヲ心ノ一ツガネニサトリヲサメテ」（『南方録』）という境地、即ち易理禅心を悟ることができ、さらにそこから自由闊達な茶を創出する事も期待できるであろう。要

論文内容の要旨

するに、易の象・数の理論こそ茶道の原理であると考えているわけである。

では、易の象・数の理論が茶道にどのような影響を与えているのか、この問題について、これまでの茶道研究の中では実証的な研究はそれほど多くはなく、深められてこなかった。また、近年、茶道の姿の構成要素、例えば茶室や露地、釜や茶碗などの茶器、禅林清規に見る禅僧の喫茶の実態や、禅と茶との精神的な繋がり等に関する先行研究は、盛んに行なわれ大きな業績を収めている。しかし、日本の禅林に於いては、易と茶がどのように受容されていたのか、また、なぜ易と禅と茶がこのような深い関わりをもつようになったかなどの問題に関しては、まだ十分に明らかにされないままである。本論文は、右の諸問題を解決しようとするものである。

本論文では、茶道を、点茶と喫茶を機縁として成立した綜合藝術として捉え、序章でまず「藝術・藝道・茶道」という言葉についての理解を述べたうえ、さらに三章にわたって右の諸問題を考察してきた。各章で考察した内容を概して言えば、次のとおりである。

まず、第一章では、易の内容とその変遷、禅林における易学研究と喫茶の実態を考察した。禅僧たちは本来外典であるはずの『易経』に極めて高い関心を示し、随所随時に易経を活かしただけではなく、実際には、仏教の理や禅的境涯との契合や類同をさせながら易経を受容していたと云える。これらのことをあわせて考えれば、禅僧や禅林と深いかかわりのある茶人たちは、易経の象と数の理を活かして喫茶の作法などを考案することも、十分有り得たことであり、極く自然のなりゆきであったとも云える。易経思想を抜きにしては語り得ない茶道の聖典である『南方録』の誕生は、やはりこうした歴史背景と大きなかかわりがあるであろう。

第二章では、陸羽・武野紹鷗・千利休と易経との関係を具体的に取り上げることによって、茶道が草創期からすでに易経思想から深い影響を受けていることを明らかにした。また、この三人は禅にも通じており、つまり、茶・易・禅は茶道の形成過程においては不即不離の関係を保ちながら互いに影響を及ぼしていたと考えられる。

第三章では、茶事の構成や進行作法などを具体的に取り上げて、さらに中国の喫茶文化との比較を意識しながら、茶道では、易の象・数思想をどのように取り入れて点前作法を考案したのか、つまり、易の象・数の理論が茶道の形成にどのように影響を及ぼしたのかについて、考察した。それによって、利休時代に易経思想に基づいた「初座は陰・後座は陽」などといった茶事の大法が定められ、今日の茶道の作法でも依然として堅く守られていることがわかった。そして、後世の茶人たちは易経の思想を生かし、さらに新たな茶道具や点前作法もいろいろと考案した。

茶道は深遠な哲理に裏付けられた東洋文化の精華である。茶道に含まれている思想は、儒家思想・道家思想もあれば、仏教思想・神道思想・キリスト教もあり、実に豊富で多種多様であるが、茶道思想そのものは儒教思想でもないし、仏教思想などでもなく、茶道思想は茶道思想であると云える。しかし、従来の茶道研究の現状は、茶人や茶道史研究に偏りがちであり、儒・仏・道などの茶道に与える影響に関する研究は、茶道思想の全容解明にとって必要なことであるが、未だあまり進んでいるとは云えない。また、日本人の心性と深く関与した日本独自な生活文化体系である茶道の精神を、世界の人々に更に一層アピールするために、茶道の理論構築は当面の課題であると考えている。本論文では、茶道の先行研究として論が深められてこなかった「茶・易・禅」という課題を取り上げたのも、茶道の理論構築の一助と考えたからである。

尚、博士学位論文の目次を添付し、論文要旨とするものである。

論文審査結果の要旨

先ず、本論文の評価さるべき特色を列記してみる。

1、本論文は「綜合藝術としての茶道」と表現されているが、論者は「藝術」「綜合」「茶道」の概念を明確に規定してから論旨を展開させるという、およそすべての学術論文が怠ってはならない、しかし現実にはしばしばおろそかにされがちな、手続きを周到に踏まえている。すなわち、本論文での「藝術」とは、明治以降の翻訳用語としての「藝術」ではなく、古来東洋で「六藝四術」などと熟された意味での「藝術」であるとする。これによって、茶道は「藝術」の一種ではあるが、西洋近世美学用語としてのアート（英）・クンスト（独）・アール（仏）、それはおおむね人間の追求の対象である三大理想とされる「真善美」の一つの「美」を追求する人間の営為およびその所産と解して大過ないと思われるが、とは明確に異なることが明らかにされる。また、茶道には建築、庭園、絵画、書、陶磁、漆器、竹細工など、いわゆる藝術のさまざまな分野が包摂されており、それゆえ茶道を一種の「総合藝術」とするのは広く行われているところであるが、論者は、茶道は庭園、建築、絵画、書、陶磁、漆器、竹細工などをただ寄せ集めているだけではなくて、包含する諸要素をある理念に基づいて体系化しているとし、その意味を明らかにするため、「総合」と区別して「綜合」の語を用いる。また「茶道」については、先行の論考を承けて、日常茶飯の行為を通して他界的な世界への超脱を意図する「他界観念的遊戯性」がその本質であり、より詳しく言えば、表現されたもの（姿・相）をとおして表現する主体（心）のありようを深め高め、かつ深められ高められた主体（心）から姿・相の表現を工夫する道、すなわち「姿（相）から心、心から姿（相）へ」の道、その意味での「藝道」の一種であるとする。

2、以上のごとき明確な概念規定を踏まえて展開される本論文は、論旨がすこぶる明晰・明快で、この点でも学術論文として勝れていると評価できる。

3、本論文は、茶道形成の原理のひとつとして特に易に重点を置いて考察する。

つとに岡倉天心が『茶の本』(The Book of Tea) で指摘したごとく、茶道の背景には東洋に生まれたさまざまな精神的伝統が流れている。インド起源の仏教、中国起源の儒家・道家の思想、日本起源の神道などである。ところで、日本に伝統する仏家・道家・儒家・神道などの思想やそれに関わる文化現象を探っていくと、必ず行き当るのが「易」の思想である。易は一般には卜占（うらない）や古代暦法に関係あるものといった程度にしか認識されておらず、易の理論を集大成した『易経』もその深遠難解のゆえに一部専門家以外には近づきがたいものであったが、実は易は、自然を人間と対立するものとして認識しこれを支配利用するのを旨とする西洋的世界観・人間観とは根本的に異なる、生々変易（へんえき）を造化（大自然）の実相として把握し、人間はその造化の化育（かいく）に参ずべきものとする東洋的世界観・人間観の思想的表現なのであった。しぜんそれは「易学」として独立の思想体系を形成するばかりでなく、仏教、儒教、道教、神道にもさまざまな形で取り入れられた。

茶道には先述のごとく、仏教、儒家・道家思想、神道などの流れが精神的背景としてあるが、当然の結果として、茶道には易に関わる思想・表現がおびただしく見られることになった。しかるに、茶道を易との関連で掘り下げて本格的に研究することは、これまで殆どなかったといってよい。本論文はこの点で、先駆的なすぐれた業績として評価できるものである。

以上は、本論文の大枠と茶道研究上の位置づけについて述べたのであるが、次にその内容の注目さるべき点をいくつか摘記してみよう。

論文審査結果の要旨

4、くり返し述べるように、日本茶道に対しては仏教思想、儒家・道家思想、神道思想がその背景として大きな影響を及ぼしているが、就中、仏教とくに禅の影響が大きく、「茶禅一味」ともいわれる。本論文の論者は、そのことを肯定した上で、中世禅林では易の研究が盛んで、禅が易をなかだちとして語られることが多く、ひいて易が禅をなかだちとして茶道に流入した場合の多いことに注意をうながす。例えば臨済宗夢窓派の僧で易にも通じていた桃源瑞仙が、易でいう「太極」は、禅でいう「父母未生、混沌未分」のところ、「諸悪莫作諸善奉行」の境と同じであるとしていることを紹介し、併せて茶道聖典とされる『南方録』で利休の茶の極意が「諸悪莫作諸善奉行」に通うものであったことを物語る挿話を紹介する。このように、茶道と縁の深い禅を通して、易が茶道に受け入れられることが多かったとの指摘は、従来の研究の盲点をついたものと評価できる。

5、「茶道名人」として、中国の陸羽、日本の武野紹鴎、千利休を挙げ、この三者も易と深いつながりを持っていたことを論じる第二章にも、いくつかの新見がみられる。例えば、紹鴎は自らの茶室を「大黒庵」と称したが、「大黒」は「太極」に通じ、実は紹鴎は易経の理論に基づいて日本茶道を系統的に綜合しようとしたのであろうとし、利休所持の長次郎黒楽茶碗「大黒」の銘は、ふつうは「おおぐろ」と呼ばれているが元来「だいこく」であったと推理する。この推理の当否は、にわかに断定できないけれども、検討に価するものである。

6、また、千利休の「利休」の号は、易の「復」の卦に由来し、「宗易」の名には「易を宗とする」との意が込められているのではないかとし、更に茶室の基準とされる四畳半は維摩の方丈に由来するとされるが実は易経の陰陽五行をかたどって一室に世界をこめたるものとの説を紹介する。これらについても当否は速断できないが、面白い説ではある。

7、第三章は、易が茶事に及ぼした影響を『南方録』に即して考究したものである。『南方録』の「墨引」の巻は陰陽五行思想にもとづく「カネ割り」の論を詳細に展開した巻であるが、古来難解な巻として有名である。論者はこの巻に出る「カネ外し」「添え置」「結びカネ」「真鉾（まほこ）のカネ」「峰摺りのカネ」「続きカネ」「括りカネ」「三つ組」などの語意を、易の理論を踏まえての解明を試みる。その多くは肯綮に当るもので、この方面の研究に進捗の一歩を加えたものと評価できる。

8、本論文の結びとして、茶道で古来重んじられている湯相（あい）・火相（あい）の論にふれて、茶道の有する独得な美意識と価値観が「感応の美」であるとされる。論者のことばをかりれば、「主客の共同作業によって創られた瞬間瞬間の美がすべてこの火相と湯相に凝縮されているのである。つまり茶道では静的な造形美だけではなく、動的な美をも常に求めているのである。その動の美は即ち感応の美ともいえよう」となる。これについて審査員の一人である千玄室氏の評言をここに引いておこう、「湯相・火相は夏季・冬季の二季に仕分けられる茶道の炉・風炉にかかわるもので、余程の実践経験を積んでも感応的に感興的にも申し述べ難き内容のものである。それを大胆に取り上げ感応の美と結びつけた研究は得難いものと評価（できる）」。

本論文は以上のごとき勝れた特色を具えてはいるが、また今後の研究において留意すべき問題点・課題もある。そのひとつは、研究に取組む態度が大胆で、論旨も明晰明快である反面、論の進め方にやや粗さが目立つ点である。いま少しの緻密さが望まれる。また、論者も気づいている如く、茶道の精神的背景には、易とともに、仏家・儒家・道家・神道の思想を汲み入れた深い宗教性がある。その点を捉えて岡倉天心は、茶道は「生の術の宗教」(religion of the art of life)、「審美主義の宗教」(religion of aestheticism) であるといい、十六世

論文審査結果の要旨

紀に来日して茶道を観察したキリスト教宣教師ジョアン・ロドリーゲスは茶道を「宗教の一様式」と見、久松真一は侘び茶は「侘びの宗教」であるといった。この宗教性はまたキリシタン茶人高山右近の存在からも察せられるごとく、キリスト教とも共存できる宗教性であると考えられる。茶道の原理としての易の探求は、進んでこのような宗教性の探求にまで拡大深化されることが望まれる。

〔結論〕本審査委員会は、本論文を、着想の独創性、論旨の妥当性、叙述の的確さ、構成の整合性などにわたって精査した結果、本論文は、若干の問題点や残された課題を含むものの、それを補って余りあるすぐれた特色をもち、博士（芸術学）の学位を授与するに十分な価値があると、全員の一致をもって判定した。